

初めて太極拳を習いに行った日、広い体育館に中国独特の曲が流れ始めた。その曲に身体の奥底から何かが滲み出るような、反対に沁み込んでいくような、不思議な感覚にとらわれた。幼い頃に聞き覚えたとしか言いようのない懐かしさ。私の記憶の中では消えてしまった筈の感覚が、突然息を吹き返したらしい。心が温かいものに包まれていく。

友だちに誘われ太極拳を習い始めて十年が過ぎた。運動神経もリズム感もない私が、途中で止めもせず続けているのは、この曲の雰囲気惹かれているからかも知れない。

中国安東市（今の丹東市）で私は生まれた。祖父の代に興した薬問屋を、薬剤師の父が引き継ぎ、日本人や中国人を大勢雇っていた。住み込みの人も十人余りいた。

その中に十二、三歳位の通いの少年が一人いて、「ショウハイ」とみんなから呼ばれ、近所への使い走りなどをしていた。日本語も話せる頭のよい子だと聞いていた。「ショウハイ」が彼の名前だと思い、四、五歳だった私も、彼をみんなと同じように呼び、周りの人から笑われていた。後にショウハイは中国語で「子供」「小児」の意と知った。

中国の季節の行事は物珍しくて楽しかった。『高足踊り』は一メートル又はそれ以上あろうかと思われる一本歯の下駄を履き、思い思いの服装で、身振り手振り面白く往来を練り歩く。また『龍舞』は龍の頭を付けた長い布の中に、人々が入り上下に動かしながらうねって歩く。龍の前では大きな玉を振り回す人がいて、それをまるで生きているかのように口を大きく開けて追いかけて回る。その光景は子供心に強烈な印象として焼き付けられた。

歩道では物売りたちが店を広げ、色々な物を売っている。竹の棒の先に藁を巻き付け、赤い飴を塗ったナツメを串に刺し、担いで売り歩く人もいる。見るからに美味しそうで、幾度か父にねだったが、蠅がたかり埃をかぶっていて不潔だからと、決して買ってはくれなかった。

ある日、ショウハイの自転車に乗せてもらっていたとき、ナツメ売りを見つけた。

「ナツメ買って。ナツメ買って」

とねだったが、

「ジャングイ（旦那さん）に叱られる」

と言って聞き入れてくれない。このチャンスを逃しては食べられない。自転車

を揺すりながらしつこくねだった。彼は誰にも言うなと念を押し、自分の小遣で一本買ってくれた。味は想像以上に甘く美味しかった。食べ終わらないうちに、裏通りに面した我が家の倉庫まで帰りついた。鉄の扉の前で彼に急かされながら、最後まで食べ終わり満足だったが、口の周りだけでなく、舌も歯も真っ赤に染まった。彼は慌てて私の口の周りを濡らしたタオルで一生懸命拭いたが消えず、二人は父に叱られた。

ある日、大人たちを手伝いながら、
「正月がきた」とショウハイが言った。

「どこに？」

「そこまで来た」

「そこって？ショウハイには見えるの？」

「見えるよ。角のおもちゃ屋まで来ている」

「私には見えないよ。ねえ、見えない」

からかわれているのが分からない。

別の日、ショウハイにいいものを見せてあげようと言われ、自転車に乗せてもらった。どこかの内玄関らしい戸を開けると誰もいないのに突然、

「イラッシャーイ」

と声がかかった。見まわすと天井からぶら下がった鳥籠に見たこともないカラフルな鳥がいる。驚いていると突然奥へ向かって、

「オキヤクサンヨーッ」

と大声で叫んだ。出てきた誰かと彼が話をしている間、私は戸を開けたり閉めたりして出入りを繰り返す。きれいな鳥は同じように、「イラッシャーイ」と言い、「オキヤクサンヨーッ」と叫ぶ。彼の用が終わるまで私は鳥と遊んだ。その日、生まれて初めて人間の口を利くオウムという不思議な鳥を知った。

十年前中国へ旅行したとき、私たちは民族踊りを見る機会があった。音楽も懐かしく体中に響き、自然に涙がこぼれた。同じような曲を太極拳のときに聞きながら、ショウハイのことや安東市での豊かだった幼児期を思い出し懐かしんでいる。あれから七十年以上が過ぎた。まだ少年だったショウハイは、勝気で我儘だった幼い女の子と過ごした、短い月日のことを覚えているだろうか。彼が元気で生きているなら優しいお祖父さんになって、孫たちを可愛がっていることだろう。

今日は太極拳の稽古の日。またあの音楽を聞きながら、幼い日の私に帰ろう。

おわり